

短報

Eriocaulon kiusianum Maxim. の正体 (大場秀章^a, 宮本 太^b)

Hideaki OHBA and Futoshi MIYAMOTO: The Identity of *Eriocaulon kiusianum* Maxim.

日本を含むアジア産ホシクサ属植物の分類学的検討を行なっているが、概ね終了し、後は学名の検討を残すだけとなった。これまでに記載された

種のうち、その正体が不明のまま残されているものがある。*Eriocaulon kiusianum* はそのひとつで、1892年に Maximowicz により彼自身が 1863 年に

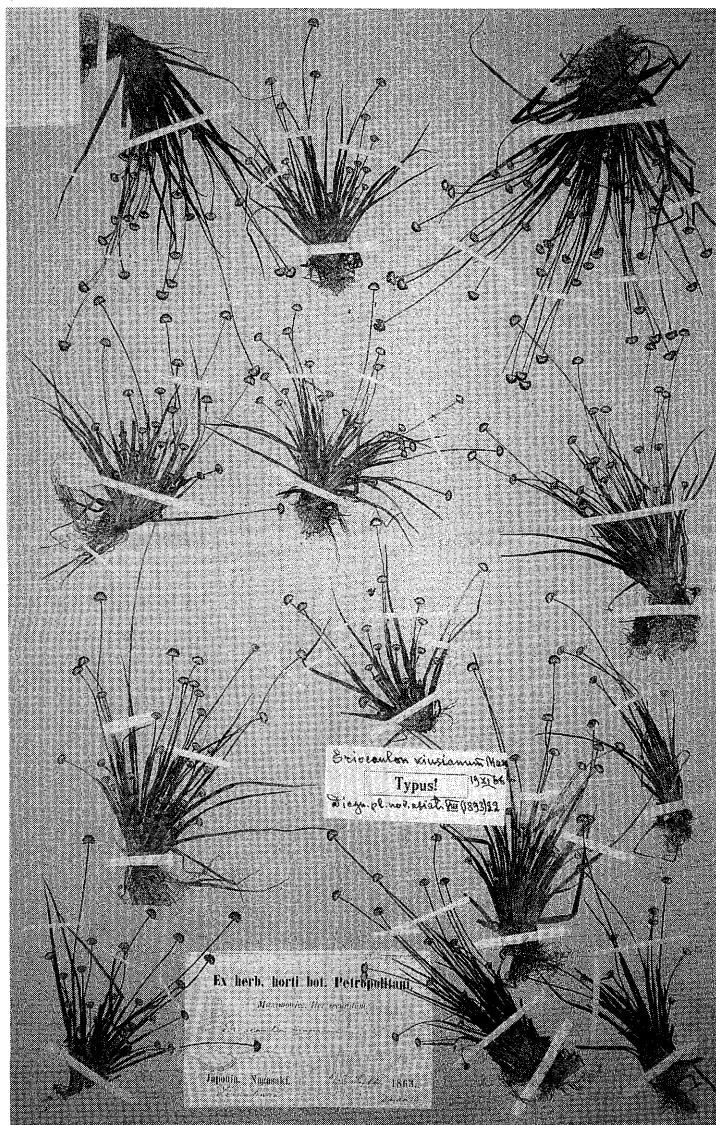


Fig. 1 Type of *Eriocaulon kiusianum* Maxim.

長崎県島原で採集した標本に基づいて命名した種である。Maximowiczはこれを*E. alpestre*と比較した。その後、同属のモノグラフを纏めたRuhland(1903)は、*E. kiusianum*については、Maximowiczの見解を採用し、これを独立種とし、*E. alpestre*と類縁があるとした。ところが、日本のホシクサ属植物の分類の基礎を築いた佐竹義輔博士は、*E. kiusianum*を不明種としている(佐竹

1940, Satake 1941).

Maximowiczの記載を読むと、capitulo griseo hemishaerico…perigonio externo spathaceo antice fisco brevissime obtuse 3-dentato…interioris phyllis unguiculatis lanceolatis…とあり、花弁(ここではperigonium interiore)が爪のある披針形という点で、ツクシイヌノヒゲに近いという印象を与える。

大場は1992年にコマロフ植物研究所を訪ねる

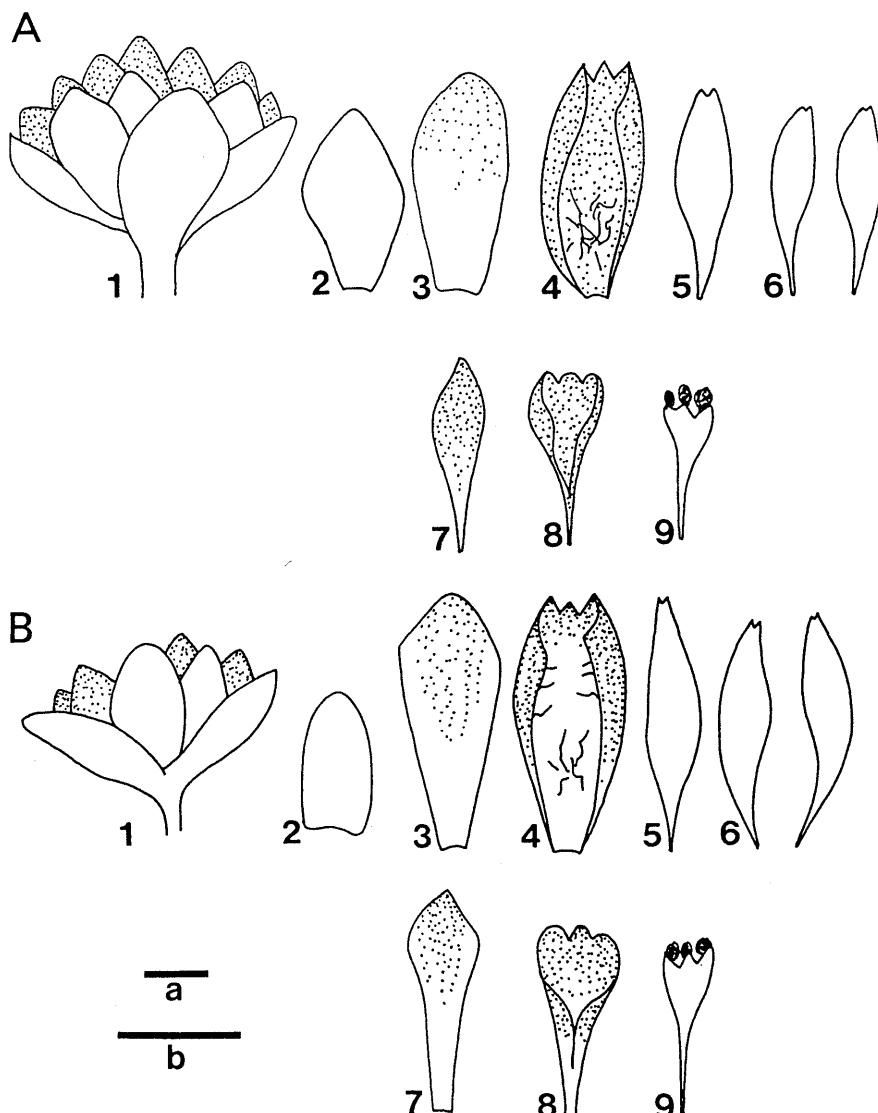


Fig. 2 *Eriocaulon kiusianum* Maxim. (A) and *E. nakasimanum* Satake (B). 1: capitulum. 2: involucral bract. 3-6: pistillate flower. 3: bract. 4: calyx. 5: central petal. 6: lateral petals. 7-9: staminate flower. 7: bract. 8: calyx. 9: petals and anthers. Scales: a (1mm) for 1 and 2; b (1mm) for 3-9.

機会があり、基準標本を検討した(Fig. 1)。持ち帰ったスケッチと写真などをもとに共同で調べた結果、頭花が黒色を帯びること、雌花花弁に爪を有さないことから、これはツクシイヌノヒゲに合致することが明らかとなった(Fig. 2)。

ツクシイヌノヒゲ *E. nakasimanum* は、Satake (1936) により福岡県で採集された標本に基づいて発表されたものであり、両者の採集地点は近い。ツクシイヌノヒゲの分類学的位置を決めるためには、ヒマラヤ産の *E. atrum*, *E. alpestre* などの検討がなお必要であり、その検討を経て改めて論評したい。

Eriocaulon kiusianum Maxim. in Mel. Biol. 13: 22 (1892)—Ruhland in Engl., Pflanzenr. Heft 13: 95 (1903). Type: Kiusiu [=Kyushu], in princ-

ipatu Simabara, 20 Septembris (Maximowicz, LE).

Eriocaulon nakasimanum Satake in J. Jap. Bot. 15: 143 (1939); in Nakai and Honda, Nov. Fl. Jap., no. 6: 64, f. 31 (1940); in Bull. Tokyo Sci. Mus., no. 4: 54, pl. IX, fig. 18 (1941); Wild Flow. Jap. 1: 82 (1983)—Kitamura, Murata and T. Koyama, Col. Ill. Herb. Pl. Jap. 3 ed. rev.: 185 (1983). Type: Kyūsyū [Kyushu]: Prov. Tikuzen, Yakatabaru prope Hukuoka (Kazuo) Nakasima no. 49, Oct. [17], 1937, TI.

Eriocaulon atrum var. *nakasimanum* (Satake) T. Koyama in Ohwi, Fl. Jap. Engl. ed.: 270 (1965).

(^a東京大学総合研究資料館, ^b東京農業大学一般教育)

日本・台湾のミヤマシキミ属について（山崎 敬）

Takasi YAMAZAKI: On the genus *Skimmia* in Japan and Taiwan

ミヤマシキミ属はヒマラヤから中国中部・南部・日本、サハリンに分布する常緑低木である。属としては明瞭であるが、種類としては特徴が少なく、分類の困難な属である。特に台湾のものの分類は不完全であった。最近エジンバラの N.P. Taylor がこの属の Monograph を纏めた (Kew Magazine 4: 168–194, 1987)。よく纏めてはいるけれど、野外での調査を欠いた標本中心の研究には無理がある。台湾のこの属の Type はすべて東大にあり、Taylor も Type を一応検討しているけれど、充分とはいがたい。特に台湾のものの扱いには賛成しがたい点もあるのでここで再検討してみる。

この属の種類の特徴は主に花にあり、花がないと分類は殆ど不可能といえる。しかし花にはかなりはっきりした特徴がある。日本、台湾に関係するのは *S. japonica* Thunb. と *S. reevesiana* Fortune である。前者は主に日本に分布し、後者は主に中国に分布する。両者は近縁なもので、Taylor は同一種の亜種関係のものとしているが、台湾には両者が生育しているので、同種とするか亜種とす

るかという解釈の問題ではあるけれど、どう扱うかは問題にしなければならない。*S. japonica* は雌雄異株で、花は4数性、雄花は4本の雄しべと退化した雌しべとがあり、雌花は1個の雌しべと4本の小さな雄しべとがある。*S. reevesiana* は雌雄の別がなく、花は5数性、花には5本の雄しべと1個の雌しべがあり、共によく発育している。この違いは、特徴の少ないのでこの属ではかなり顕著なので、別種として扱うのが妥当である。

S. japonica はよく知られるように、日本の中部以南の低地にミヤマシキミ var. *japonica* が、日本全土の高所にツルシキミ var. *intermedia* f. *repens* が分布し、それぞれにウチダシミヤマシキミ f. *rugosa*、ウチダシツルシキミ f. *intermedia* が分化している。ミヤマシキミとツルシキミとは連続的に区別するのが難しい個体もあるが、ミヤマシキミは大体 600m 以下の常緑樹林下に生え、ツルシキミは 800m 以上の落葉樹林下にあるので、分化の程度が低い変種関係のものとして分類してよいと思う。ツルシキミはサハリン南部、南千島から屋久島までの冷温帶の林下に分布し、ミヤ